

第26回

国際開発研究大来賞

OKITA Memorial Prize for International Development Research

一般財団法人 国際開発機構 FASiD

「国際開発研究 大来賞」は、多様化する国際開発のニーズに対応し新たな指針を提示する研究を奨励するため、当財団初代評議員会会長を務められた元外務大臣 大来佐武郎氏を記念して、1997年に創設されました。第26回(2022年度)の受賞作品が決定しましたのでご紹介します。



工藤 晴子 著

『難民とセクシュアリティ
—アメリカにおける性的マイノリティの包摂と排除—
(明石書店) 2022年

これまでの受賞作品

- 第1回 廣瀬昌平・若月利之編著 『西アフリカ・サバンナの生態環境の修復と農村の再生』農林統計協会 1997年
- 原 洋之介著 『開発経済論』岩波書店 1996年
- 第2回 絵所秀紀著 『開発の政治経済学』日本評論社 1997年
- 深川由起子著 『韓国・先進国経済論—成熟過程のミクロ分析—』日本経済新聞社 1997年
- 第3回 中兼和津次著 『中国経済発展論』有斐閣 1999年
- 辻村英之著 『南部アフリカの農村協同組合—構造調整政策下における役割と育成—』日本経済評論社 1999年
- 第4回 峯 陽一著 『現代アフリカと開発経済学—市場経済の荒波のなかで—』日本評論社 1999年
- 第5回 黒崎 卓著 『開発のミクロ経済学』岩波書店 2001年
- 西川 潤著 『人間のための経済学—開発と貧困を考える—』岩波書店 2001年
- 第6回 石井正子著 『女性が語るフィリピンのムスリム社会』明石書店 2002年
- 脇村孝平著 『飢饉・疫病・植民地統治—開発の中の英領インド』名古屋大学出版会 2002年
- 第7回 平野克己著 『図説アフリカ経済』日本評論社 2002年
- 第8回 石井菜穂子著 『長期経済発展の実証分析』日本経済新聞社 2003年
- 安原 毅著 『メキシコ経済の金融不安定性』新評論 2003年
- 第9回 藤田幸一著 『バングラデシュ農村開発のなかの階層変動: 貧困削減のための基礎研究』京都大学学術出版会 2005年
- 第10回 谷 正和著 『村の暮らしと砒素汚染—バングラデシュの農村から—』九州大学出版会 2005年
- 第11回 湖中真哉著 『牧畜二重経済の人類学—ケニア・サンプルの民族誌的研究』世界思想社 2006年
- 第12回 牧田りえ著 『Livelihood Diversification and Landlessness in Rural Bangladesh』The University Press Limited 2007年
- 第13回 武内進一著 『現代アフリカの紛争と国家—ポストコロナル家産制国家とルワンダ・ジェノサイド—』明石書店 2009年
- 第14回 田辺明生著 『カーストと平等性—インド社会の歴史人類学—』東京大学出版会 2010年
- 第15回 該当作なし
- 第16回 佐藤百合著 『経済大国インドネシア—21世紀の成長条件—』中央公論新社 2011年
- 第17回 森 壮也・山形辰史著 『障害と開発の実証分析—社会モデルの観点から—』勁草書房 2013年
- 山尾 大著 『紛争と国家建設—戦後イラクの再建をめぐるポリティクス—』明石書店 2013年
- 柳澤 悠著 『現代インド経済—発展の淵源・軌跡・展望—』名古屋大学出版会 2014年
- 第18回 古川光明著 『国際援助システムとアフリカ—ポスト冷戦期「貧困削減レジーム」を考える—』日本評論社 2014年
- 第19回 宮城大蔵編著 『戦後日本のアジア外交』ミネルヴァ書房 2015年
- 第20回 田中由美子著 『「近代化」は女性の地位をどう変えたか—タンザニア農村のジェンダーと土地権をめぐる変遷—』新評論 2016年
- 第21回 佐藤 仁著 『野蠻から生存の開発論—越境する援助のデザイン—』ミネルヴァ書房 2016年
- 堀江未央著 『娘たちのいない村—コメ不足の連鎖をめぐる雲南ラフの民族誌—』京都大学学術出版会 2018年
- 第22回 友松夕香著 『サバンナのジェンダー—西アフリカ農村経済の民族誌—』明石書店 2019年
- 第23回 谷口美代子著 『平和構築を支援する—ミンダナオ紛争と和平への道—』名古屋大学出版会 2020年
- 第24回 下條尚志著 『国家の「余白」—メコンデルタ 生き残りの社会史—(京都大学学術出版会) 2021年
- 第25回 下村恭民著 『日本型開発協力の形成—政策史1・1980年代まで—』シリーズ「日本の開発協力史を問います」1(東京大学出版会) 2020年

審査委員選評

性的指向やジェンダーを理由として迫害される性的マイノリティの存在は長らく不可視化されてきたが、彼ら・彼女らの保護の問題は2000年代に入って注目を集めるようになり、UNHCRなど国際機関もその重要性を唱え、対策を練るようになった。

本書は、世界で最も多くの難民を受け入れているアメリカにおける「性的マイノリティの難民」の問題を、国際社会学／移民研究の方法で、歴史的、政治的、社会的な大きな文脈の中で読み解いたものである。筆者は、これまでの難民研究が法的な難民認定問題に留まりがちであり、庇護や難民政策の政治的かつ歴史的な特性を見逃しているという批判的視点と、難民と移民は二分化できるものではなく連続線上に位置する相対的な存在(庇護と移住のネクサス)であるとの認識から研究を進めた。

国家は権力的な国境管理によりその時々政治が望まない人々を「排除」しようとする。支援側は難民条約の柔軟な解釈でより多くの難民を「包摂」しようとする。性的マイノリティの難民申請者は、この二つの波がせめぎ合う中で、手探りしながらも主体的に信憑性のある物語を作り上げ、それに自らを同一化し、ついには難民認定を得る。メキシコとアメリカの間を長年に亘って行き来していた「移民」が、支援者や難民審査官との対話の中で「難民」として自覚していく過程、いわば「社会的に構成された難民になる」プロセスはとても興味深く、それはまた「難民とは誰か」という問いを改めて提示する。

作者は、UNHCR勤務の経験もあり、理論に走らない実践者としてのバランスの取れた眼を持っている。その点でも本書はパイオニア的で独自性のある研究書である。

日本では性的マイノリティの難民の問題はまだ広くは認識されていないが、2018年にはレズビアン女性に初めて難民認定がなされたほか、入管庁が現在策定中の「難民認定ガイドライン」も、性的指向、ジェンダーによる迫害の認定についての初めての指針を示している。

そのタイミングで出された本書は、その豊かな表現力と相まって、日本の難民研究の最先端を行く高い水準の作品であると共に、難民審査担当者や支援者にとって実践的な価値も持つ。本書はまさに国際開発研究大来賞にふさわしい作品であると言える。(滝澤三郎)

受賞者の言葉

このたびは、国際開発研究大来賞を受賞させていただき誠にありがとうございます。審査員の方々、出版にご尽力いただいた明石書店の方々、本書の研究に対してご指導くださった伊藤るり先生と小井土彰宏先生、長く支えあってきた研究仲間にも心より感謝申し上げます。また、アメリカでの調査において、それぞれの移動の経験を教えてくださいましたみなさん、移民・難民支援団体みなさんに、この場を借りて深く御礼申し上げます。

現在、わたしたちの多くは難民・強制移動の現象をグローバルな問題として認識し、特定の国や地域、紛争や対立と結びつけた「集団」として、難民の人々を理解しているのではないのでしょうか。しかし、現実として「難民」と呼ばれる人々の背景や状況は実に多様です。近年では特に、人道支援分野においては「LGBTIQ+」と総称される性的マイノリティの難民の保護が、重要課題として認識されています。本書は、アメリカ合衆国を事例として、ゲイ、レズビアン、トランスジェンダー、クィアの人々の、庇護申請を含む移動の経験と、かれらをめぐる国境管理と難民受け入れの政策、制度、言説の変遷に注目しました。特に、移民・難民政策の歴史と人権外交のなかで、性的マイノリティの難民の保護がどのように新たな難民問題として規定され、排除と包摂の対象となってきたのか、という問いを軸に、構造的な問題とローカルな文脈における人々の経験とを結びつけることを試みています。

本書は、難民というマイノリティのなかから、さらにマイノリティの立場にある人々を「発見」することを目的としていません。そうした人々の存在についての認識を広めたいという思いもありますが、なによりも、人の移動とセクシュアリティには関わりがある、ということを議論したつもりです。従来の人の移動をめぐる研究には、ながらも、異性愛関係や異性愛規範を中心とした議論の進め方が存在してきました。また同様に、セクシュアリティ研究においては、性的マイノリティが「市民」であることが、前提となってきたといえるでしょう。私の研究は、そうした問題設定そのものを問い直す、クィア移住研究というアプローチをとっています。人の移動の過程における、ジェンダーやセクシュアリティのあり方を通じた市民と非市民、普通と異常の対立関係や、その対立を内包する移動・移住を経験した人々が、規範に対してどのように対応し、時に抵抗してきたのかという点に、私は常に関心を寄せてきました。また、研究の途中で、UNHCRにて勤務する機会を得ました。性とジェンダーに基づく暴力のサヴァイヴァーの方々の支援、支援従事者による性的搾取の問題、難民支援そのものが抱える異性愛規範の問題などに取り組む中で、やはり人の移動とジェンダー、セクシュアリティは、様々な段階や過程において関わっているということを実感するに至りました。こうした関わりのすべてが本書で議論されているわけではありませんが、少なくともその一端を示すことができたのではないかと思います。

大来賞を受賞させていただくことによって、国際開発分野で研究・活動されているみなさまにも本書に関心を寄せていただければ、大変幸いに思います。

工藤 晴子



くどうはるこ

神戸大学大学院国際文化学研究所講師。博士(社会学)、修士(社会学、難民・強制移動研究)。専門は国際社会学、ジェンダー／セクシュアリティ、難民・強制移動研究。UNHCRエジプト・カイロ事務所、トルコ・ガジアンテップ事務所にて性とジェンダーに基づく暴力の予防や対応を中心とした難民支援に携わる。2021年より現職。

主要著書・論文

『難民・避難民の移動と支援におけるジェンダーに基づく暴力』『トラウマティック・ストレス』20号(2022)。「クィアとしての難民とことば」『ことばと社会』16号(2014)。「セクシュアリティとトラウマの動員—米国サンフランシスコ・ベイエリアにおけるメキシコ出身クィア庇護希望者のナラティブ構築」『年報社会学論集』27号(2014)。

第26回 応募作品の傾向と選考経緯

2021年4月から2022年3月までに出版された国際開発分野における課題を主たるテーマとした日本語の研究図書を対象として公募したところ、41作品の推薦・応募があった。本年度は対象地域としてはアジア地域を取扱う作品は引き続き多く、半数程であった。そのうち中国と並んで台湾が各3作あった。アフリカ地域を取り上げたものは9作で、昨年より増加した。中東2作、南極域についても1作あった。

FASID国際開発研究センターにおいて予備審査を行い、受賞作に加えて下記4作が最終審査対象として選出された。今年は新しい視点を含め、多岐にわたるテーマの作品が寄せられた。そこには人権や差別について直接・間接に扱った良書が多かったことが特徴であった。審査過程における委員による意見はおおよそ以下のとおりである。

(書名五十音順)

『アブラヤシ農園開発と土地紛争 –インドネシア、スマトラ島のフィールドワークから』

(中島 成久、法政大学出版局)

西スマトラ州ミナンカバウ社会でアブラヤシ農園開発に利用されてきた共有地の資源利用と管理のあり方を歴史的にたどり、現代の土地紛争の現状を分析している。「共有地」を利用する意思決定のシステムと近代的な法体系の契約との齟齬をどう解決するか、という問題の解決に大きな示唆を与えている。

『混迷するインドネシア・パプア分離独立運動 –「平和の地」を求める闘いの行方』 (阿部 和美、明石書店)

現在に至るまで解決に至っていないインドネシアのパプア分離独立運動を取り上げ、インドネシア独立より各政権が取り組んだ対パプア政策の変遷とパプア社会の変容を描いている。紛争地域の開発という国際開発課題に関する優れた分析を行った書籍であるといえる。

『持続可能性の経済理論 –SDGs時代と「資本基盤主義」』 (倉阪 秀史、東洋経済新報社)

現在の経済学ではSDGsの達成は難しいとした上で、「資本基盤主義」に立った市場介入を訴える点で議論を巻き起こす可能性を秘めた好著。従前の経済学を踏まえううえで、持続可能性を達成するための新たな経済理論を構築しようとする試み。SDGsの推進を経済理論によって裏付け、経済政策の構想に役立つ視点を提供している。

『人権の哲学 –基底価値の探究と現代世界』 (木山 幸輔、東京大学出版会)

人権の概念・重要性について様々な哲学理論や議論(政治的構想、自然本性的構想等)を丹念にレビューしたうえで、自らの仮説検証をし、今日の国際潮流や開発援助について人権の観点から検討し、あるべき方向について示唆を導いている。理論面の貢献は大きい。

【第26回(2022年度)審査委員会】

委員長 杉下 恒夫 (FASID 理事長)

委員 絵所 秀紀 (法政大学名誉教授)

大野 泉 (政策研究大学院大学教授)

北野 尚宏 (早稲田大学理工学術院国際理工学センター教授)

滝澤 三郎 (東洋英和女学院大学名誉教授 ケア・インターナショナル・ジャパン副理事長)

藤田 伸子 (FASID 専務理事)

表彰式・記念講演会

ご案内 (Zoom によるオンライン配信)

2023年1月11日(水) 13:00～

講演タイトル「難民とセクシュアリティ」

工藤 晴子

近年、人道支援において「LGBTIQ+ 難民」の保護は重要課題として認識されるようになっていきます。しかし、セクシュアリティに関する規範は人の移動の過程において、むしろ排除の機能をもってきました。性的マイノリティの人々の移動、とりわけ強制移動と呼ばれる現象のなかにセクシュアリティの問題がどのように規定されてきたのか、また、性的マイノリティの人々が難民として移動する経験について、米国での調査をもとにお話しします。

会場 ハイブリッド式 オンラインzoomによる参加者のみ募集します

くわしくは https://www.fasid.or.jp/okita_memorial_prize/3_index_detail.php

参加無料・要申込み オンラインフォームからお申込みください

締切 2023年1月5日(木) 定員60名程(定員に達した時点で受付を終了します)

お問合せ FASID国際開発研究センター 大来賞事務局(服部) email: okita@fasid.or.jp / Tel: 03-6809-1997

国際開発研究 大来賞

OKITA Memorial Prize for International Development Research

受賞候補作品 募集のご案内

「国際開発研究 大来賞」は、国際開発の分野における研究奨励と促進、良書の発掘に資するため、国際開発の様々な課題に関する優れた指針を示す研究図書を顕彰するものです。

第27回(2023年度)についても、みなさまからのご推薦・ご応募をお待ちしております。

対象となる作品

- (1) 開発援助を含む国際開発の分野における課題を主たるテーマとする日本語の研究図書(翻訳、随筆、エッセイ、体験記、自伝、紀行文、事業報告書等を除く)であって、国際開発の実践活動の向上に資するもののうち、特に斬新性、普及性の点で顕著な業績、貢献が認められるもの。
- (2) 個人又は団体が編者あるいは著作者の場合は、個人の執筆者名が明記されているもの。
- (3) 2022年4月から2023年3月までの間に、初版が国内で市販されたもの。

大来 佐武郎(おおきた さぶろう)氏

1914年旧満州大連市に生まれる。1937年東京帝国大学工学部卒業、逓信省入省。戦後は経済安定本部、経済企画庁においてエコノミストとして活躍。1963年に同庁総合開発局長退官、1964年日本経済研究センター理事長就任、南北問題や開発援助分野で活躍。国際開発計画委員会(ティンバーゲン委員会・ピアソン委員会)の委員や『成長の限界』を刊行したローマクラブのメンバーを務める。1971年国際開発センター理事長、1973年海外経済協力基金総裁などを歴任し、1979年の大平政権において外務大臣を務める(～80年)。その後も国際大学学長、対外経済問題諮問委員会座長、FASID初代評議員会会長、国際開発学会会長等、国際開発分野で数多くの足跡を残す。1993年逝去。

審査・表彰

- 表彰** 審査委員会で選考された作品に対し、正賞(楯)と副賞(50万円)を贈呈します。
- 審査** 当財団国際開発研究センターによる予備審査を経て、審査委員会が行ないます。

推薦・応募

推薦者(自薦・他薦可)は、所定の「推薦書」へ入力し、email添付にて送信とともに、当該図書2冊を添えて応募・推薦してください。なお、推薦書類・当該図書は返却しませんのであらかじめご了承ください。

推薦書 ダウンロードしてください。

https://www.fasid.or.jp/okita_memorial_prize/2_index_detail.php

締切 2023年5月末

受賞作品の発表と表彰式

2023年11月に推薦者へ通知、発表し、表彰式を行います。(予定)

推薦・お問合せ先

一般財団法人 国際開発機構
国際開発研究大来賞 事務局(服部)
email: okita@fasid.or.jp / TEL: 03-6809-1997

本事業には公益財団法人 三井住友銀行国際協力財団による助成を受けています。

一般財団法人 国際開発機構
国際開発研究センター
国際開発研究 大来賞 事務局(服部)

〒106-0041 東京都港区麻布台2-4-5 メソニック39MTビル6階
Foundation for Advanced Studies on International Development
email:okita@fasid.or.jp TEL:03-6809-1997 FAX:03-6809-1387 <http://www.fasid.or.jp>